

102歳日野原さん 童話デビュー

祖母の最期テーマに執筆

102歳の現役医師・日野原重明さんが、子どもの目に映った身近な家族の死を物語にした童話の絵本「だいすきなおばちゃん」（朝日新聞出版）を出す。高齢社会の生き方などについて多くの著書があるが、童話は今回が初めてだ。



絵本を手にする日野原重明さん。念願の「童話作家デビュー」がなかった。東京都中央区

日頃から「新しい何かに挑戦 10年ほど前から、生命の尊さについて語る『いのちの授業』」

「おばあちゃん」とあやとりで遊ぶなど、楽しく過ごしていた。だが、おばあちゃんは体を壊し、家で寝付いてしまう。「お



家族写真に写る幼少期の日野原さん（前列右から2番目）と祖母（右端）＝日野原さん提供

を国内外の小学校で続けるうち、このテーマを自作の童話でも伝えたい、と考え始めた。構想を練る中で、子どもの頃に同居していた祖母の、臨終の日の出来事が脳裏に浮かんだ。

命の尊さ「家族で語り合って」

「かあさん」と「ヘルパーさん」が介護していたが、やがて最期の時がやってくる。

日野原さんは祖母が亡くなる時、「ゴロツ」とのどが鳴ったのを覚えている。「最後の息だったんだね」。目尻の深いシワに涙が一筋、伝っていたという。「お別れの時が来た。おばあちゃん、それを知って涙が出たんだ。あの涙は『お別れの印』なんだ、と思いました」

内科医として、多くの死をみとってきた。「死を話題にするのは、悲しいし怖いけれども、避けて家族で語り合い、準備してほしい。むしろ、そうすることで私たちは心に安き（平安）を得られるはずだと信じて書き上げました」

絵を担当した岡田千晶さん（52）は、「しんみりとせず、生前のおばあちゃんとの思い出をいきいき描くことに努めた。亡くなってもおばあちゃんとマリちゃんの心がつながっていることが、読んだ方に伝わればうれしい」と話す。20日発売。

（寺下真理加）